
永遠の愛

渡辺之介

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

永遠の愛

【Nコード】

N9527C

【作者名】

渡辺之介

【あらすじ】

一命を取り留めた光輝。自分の気持ちを瞳に打ち明ける……

出会い…そして（前書き）

未熟者ですが御観覧下さい。

出会い…そして

僕の名は、中条 光輝（なかじょう こうき）。

これといった趣味も特技もなく、頭もけして良いわけでもなく、ただ何となく今まで生きてきた。

女の人を好きになったことだってなかった。

そんなある夏の日、友達^{たつや}の達也と芳樹^{よしき}と夏祭りにいった。

「それにしても、すごい人の数だな！」

「なかなか前に進めねえ！！」

しびれを切らした芳樹は素早い身のこなしで前にすすんで行く。

僕らもそれについていった。

しかし、なかなか追いつかない。

「芳樹！早すぎる！！」

「きゃっ！」

「イテっ！！」

僕は誰かにぶつかり、転ばせてしまった。

しかし、芳樹を見失うと困るので、僕はろくに謝りもせずになかの場から芳樹を追いかけた。

ぶつかったのは女の人だった。

綺麗な黒髪、小麦色の肌、つばらな瞳……………。

とても可愛かった。

そして、ようやく僕と達也は芳樹に追いつき、三人でバカ騒ぎして一日が終わった。

夏祭りの日から何週間かが過ぎ、まだあの出来事を考えていた。

そう…僕は、あの女の人に一目惚れをしてしまったのだ。

そしてそれは、僕の初恋でもあった。

夏の終わり頃のある日、達也と芳樹とファミレスに飯を食べに行った。

するとその店には…

あの女の人がバイトしていた。

「ご注文はお決まりでしょうか？」

「この前はごめんなさい!!」

僕の口はかつてに謝ってしまった。

覚えてる訳ないのに……

「大丈夫です。気にしてくれてありがとうございます。」

僕は驚いた。彼女は僕のことを覚えていたのだ。

ふと彼女の名札を見ると、五十嵐 瞳（いがらし ひとみ）と書いていた。

その日以来ほぼ毎日そのファミレスに飯を食べに行った。
彼女に会うために

そのうち僕は彼女と仲良くなり、メールアドレスを交換するまで友好を深めた。

「今度の日曜日暇だったら遊園地に行こう」
僕は緊張しながらメールの送信ボタンを押した。

返信は思っていたより早かった。

「いいよ。日曜日はバイトも休みだし」

僕は嬉しくて一人でニヤついていた。

「じゃあ1時に公園に待ち合わせでいい？」

「もちろんOK。」

返信がきた時、僕は嬉しくて、嬉しくてたまらなかった。
生まれて初めてデートに誘えた。

そして、デート当日を迎えた。

待ち合わせ時間の15分前に僕は公園に着いた。

瞳はもう来ていた。

「早いな！」

「楽しみにしてたから早く来ちゃった。」

そんな会話をして僕たちは遊園地まで歩いた。

遊園地に着いたら

ジェットコースター

メリーゴーランド

コヒーカップ ………

色々な乗り物に乗った。

中でも思いでに残っているのは 観覧車。

僕は高いところが苦手だった。 しかし、乗れないのは格好

悪いので我慢して乗った。

隣ではしゃぐ瞳が相変わらず可愛かった。

瞳に見とれていたら怖い気持ちも忘れていた。

「私の顔に何かついてるの？」

「い、いや、別に……」

僕は恥ずかしくなった。 顔が赤くなっているのも気付いた。

“今日、『好き』って伝えよう”

そう思った。ただ見ているだけだと辛いことが分かったから…

遊園地の帰り、僕は告白のタイミングを伺いながら、緊張して歩いていた。

「今日は楽しかった！また来ようね」

「うん。そうだね」

遊園地からはすぐ待ち合わせた公園に着いた。

「今日はありがと!!!じゃあまたね」

「い、家まで送るよ!」 「いいよ。そんなに気遣わなくて」

「いいって。一人だと危ないだろ」

「わかった。じゃあちゃんと私のこと守ってよ!」 「まかせとけて」

僕は瞳を家まで送った。

「じゃあ、またね」

「じゃあな!!!」

僕は瞳に“好き”と伝えられなかった。

悔しさと刹那さの入り交じった気持ちになった。

僕は一人、家へ向かって歩いていった。

バン!!!!

「大丈夫ですか?大丈夫ですか?きゅ、救急車をよばないと!」

僕は車に引かれて意識を失った。

間もなく救急車に運ばれ近くの病院に搬送された。

再会（前書き）

あまり自信はありませんが、どうぞご覧ください。

再会

“ここは何処だ？あつちで手を振ってる人がいる。誰だろう？”

「頭を強く打っていますが、幸い呼吸はしてますし、心臓も動いています。」
医師が光輝の両親に丁寧な今の状態を説明している。

「ただ…意識がないので…まだ安心はできません」
光輝の両親は納得出来ない様子だ。

「う、う、家の子は、だ、大丈夫なんですよね？た、助かりますよね？」

光輝の父親はとても心配そうに医師に聞き返している。
母親は言葉を失い…ただ、ただ泣くばかりであった。

“こっちに向かって走ってくる。でも…一体誰だろう？”

ブーブー ブーブー …

光輝の携帯電話が震え出した。

少しためらい光輝の父が手に取った。

「もしもし」

「あ、もしもし…あれ？光輝じゃない」

「私は光輝の父だ。今取り込み中だから…またかけ直してくれ

ないか？」

「はい。わかりました。失礼します」

光輝どうしたのかな？

まさか、事故？

そんな訳無いか…

瞳は少し不安になった。

“あつ。隣に座った。綺麗な黒い髪に隠れて顔が見えない。
本当に誰なんだ？”

「電話だれだった？」

光輝の母は震えた声で父に聞いた。

少し沈黙が続き、父が口を開いた。

「光輝には彼女がいるのか？」

「え？」

光輝の母は驚いた。

「だとしたら…光輝が交通事故で意識を失っていること…伝え
た方がいいよな？」

ブーブー ブーブー …

また光輝の携帯電話が震え出した。

今度は母が電話に出た。

「もしもし」

「光輝の彼女の瞳といいます。不安になってかけ直してしま
いました。」

.....
「やっぱりそうだったのね。光輝には彼女がいたのね。」

母は父に受話器を渡した

「光輝は今病院にいる。交通事故で意識を失ったんだ。」

「頼む！光輝の為に病院に来てくれないか？」

光輝の父は瞳に必死の思いで頼み込んだ。

「今すぐ行きます！」

私は信じられなかった…次第に冷静さをなくし…

涙がこぼれ落ちそうになった。

「早く行かなきゃ…」

私は涙を必死にこらえて病院まで走った。

死なないで……

“その女の人は、小麦色の手でぎゅっと僕の手を握った。そして、何かつぶやいた。

聞き取れない。お前は一体誰なんだ。”

私はやっと病院の光輝の部屋にたどり着いた。

「こ、光輝！」

私は人目も一切気にせず光輝の側に寄った。

「光輝の側で手握ってやんな」

光輝の父はそう言って、母を連れて部屋を出た。

「ごめん！光輝、本当にごめん。私のこと、家まで送らなければ……」

“もう一度女の人の顔を見た。つぶらな瞳から……涙がこぼれる。瞳？”

その瞬間……

僕は永い眠りから覚めた気がした。

瞳が僕の手を強く握って、泣いていた。

「泣くなよ」

「……え？」

「だから泣くなって」

「こ、光輝！」

私は幻を見ていると思った。

でも、そこにいるのは紛れもなく私の愛する人。

光輝だった。

「もう！心配したじゃない！」

「ごめん。ごめん。」

「本当に心配したんだから」
瞳はまた泣き出した。

僕は瞳をぎゅっと抱きしめた。

もう二度と離れないように…
離さないように…

告白（前書き）

第三話目です。よろしくお願いします！

告白

この前…

私、光輝のお父さんに“彼女”って言っちゃった。

いつの間にか、“彼女”のつもりになってたんだ…

でも、二人は付き合ってるわけじゃないんだ。

今度、光輝に自分の気持ちを話そう。

はじめをつけなきゃ…

“好き”って伝えよう

あの日から一週間

光輝は退院の日を迎えた。

病院を出て、迎えに来た父さんの車に乗り込んだ。

「無事に退院できてよかったな」

「うん」

沈黙が流れた。

すると、父さんが沈黙を破った。

「瞳ちゃんだったかな？あの娘とは、どうなんだ？」

「別に…なんでもない」

また沈黙が流れた。

「まあ、大事にしるよ」 「……………」

午後6時

家に着いた。

台所では母さんが忙しそうに夕飯を作っていた。

「おかえり〜。今日は退院記念で、光輝の好きなカボチャコロッケだよ！」

「マジで！ありがとう」

そういつて、光輝は2階の自分の部屋に行った。

携帯電話を手にとると、受信BOXに瞳からメールが届いていた。

「退院おめでとう」

光輝はメールを見るなりすぐに返信した。

「ありがとう。話があるんだ。明日、会える？」

この時、決心した。

明日、瞳に自分の気持ちを打ち明けようと…。

瞳からメールが返ってきた。

「会えるよ！！じゃあ、いつもの公園に1時ね。」

「わかった。じゃあ明日ね！」
と、メールを返した。
僕は気持ちが高ぶった。

午後7時

家族と夕飯を食べた。

父さん、母さんといろんな話をした。

でも、どの話も記憶に残らない…

今は、明日のことで…

瞳のことで頭がいっぱいだ。

それから、風呂にはいつて、音楽を聞いて、TVを見て…

でも、やっぱり何をしていても上の空だった。

午後11時

布団に入った。

それから何時間も瞳のことを考えていた。

結局、実際に寝たのは、3時過ぎだった。

朝：10時に起きて、軽い朝食をとった。

そのあと、ゲームをして、音楽を聞いた。

1時間半くらいがたった。

12時

昼食はカップラーメンを食べた。

しっかり歯を磨き、ガムを噛みながら家を出た。

20分歩いて、光輝が先に公園に着いた。

ブランコに座り、瞳を待っていた。

5分くらいして、瞳が来た。

「ごめん！遅れちゃった」

「余裕！まだ、1時になってないし」

『あのさ』

同じタイミングで声が出た。

「今日は俺が話明日って呼んだから、俺が話すよ。」

そういつて、光輝は話し始めた。

「俺、夏祭りで瞳にぶつかっちゃったじゃん？その時からずっと気になって……」

「それでどんどん気持ちが大きくなっていったんだ。」

光輝は少し間を空けて、
叫んだ。

「俺は世界で一番瞳が好きだあ」

「俺と付き合ってくれえ」

私は嬉しかった。

光輝も同じ気持ちでいてくれたことが

「私も光輝が好き……てかびっくりした。私が言おうと思ってたのに」

「今日からまたよろしくね!!」

光輝は何も言わずに抱きしめた。

強いけど、とっても優しくて……温かった。

温もりを感じた。

それから、体を離して、二人は手を握った。

「今から暇？」

僕の問いに瞳は嬉しそうに答えた。

「暇だよ!どっか行こう!!」

「じゃあまた遊園地行くか？」

「うん。行きたい!」

そう言って、二人は歩き出した。

この時はまだ、どんな未来がおとずれるかもしらずに、ただ無邪気に笑っていた……

一転…（前書き）

クライマックスが近づいてきました。見てもらえれば嬉しいっす。

一転：

二人が付き合い始めて、一ヶ月くらいがたち。
街は雪がヒラリヒラリと舞降る季節になった。

街はクリスマスムードで一年のどんな行事よりも盛り上がっているように思えた。

クリスマスの日は、二人で一緒に過ごした。
互いの親も二人の関係を知っている。

そして、今年も残すところあと数時間。
二人で一緒に年を越す約束をしていた。

もちろん、二人が始まったあの公園で待ち合わせをしている。

午後11時

約束の時間になった。

僕は夏に買い置きしていた花火を持って家を出た。

「おまたせ」

「おそいよ」。自分から誘ったくせに!!」

瞳は少しほっぺを膨らませて言った。

「ごめん。ごめん。これ持ってきたから許して!」

僕はそう言って花火を出した。

「わあ」。年越し花火とか面白そうじゃん」

「だろ?」

僕は花火の袋を少し乱暴に開け始めた。

「でも、しけつてたりしてね…」

瞳の言葉は的中した。

花火に火をつけようとしても全くつく気配がない。

「瞳が変なことゆうからだよ」

「まあ、いいじゃん。しかたない。雪で遊ぼ!」

瞳は無邪気な笑顔で言った。

今年の冬は暖冬で雪が少ない。でも、元々雪が多い地方なので、公園には雪が積もっている。

バン

瞳は僕におもいつきり雪玉を投げた。僕は反撃して、二人で転がったり、雪を掛け合って……………

気が付けば二人とも雪まみれになっていた。

すると、

ボン　ボン

除夜の鐘が鳴り出した。

こうして、二人で新しい年を迎えた。

それと同時に永遠を微かにだけ感じる事ができた。

「じゃあそろそろ行くか」

「そだね」

今から神社に初詣に行く。

「神社行ったら、おさい銭して、おみくじひいて……………いろいろしくちゃ」

「いろいろって、二つしかないじゃん」

そんな会話をしながら歩いていると、神社に着いた。

「じゃあ、おさい銭しようぜ」

「うん」

カラン カラン

「瞳、なに願った？」

「光輝とずっと一緒にいられますようにって」

「心配すんな。ずっと一緒にいるから」

「じゃあ私のこと、どんな時でも守ってよ」

「おう。当たり前だろ！」

携帯をふと見ると

午前0時48分。

そろそろ帰ないと瞳の父さんに怒られるな…

「瞳、そろそろ帰るぞ」 「もう少し一緒に居たいのになあ」

「駄目だって怒られるの俺なんだから…」

「そだね。じゃあ今日は帰ろう」

そして、帰ろうと手を繋ごうとした時。
急に瞳が倒れた。

「ひ、瞳？おい、瞳？大丈夫か？」

「……………」
「おい、瞳！瞳！！」
「……………」

いくら叫んでも返事がない。

そして、誰が呼んでくれたか分からないが、救急車が来て瞳を乗せた。

僕は救急車に乗り込み、必死に叫んだ。
「瞳！瞳！！瞳！！！！」
って何回も叫んだ。

なんで？

なんで返事しないの？

疲れて寝たのかな？

「落ち着いてください！助かるように全力を尽くします。」

と、救急車に乗ってる人が言った。

助かるように全力を尽くす？

何言ってるんだこの人

瞳は寝てるだけなのに……

僕は今起きている状況を理解していた。

頭をよぎる嫌な予感。

瞳。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9527c/>

永遠の愛

2010年10月11日04時39分発行